



北海道サケネットワーク
ニュースレター 45



2014. 11. 15

サケネットワークの総会とサケ会議が無事に終了！！

今年度の“北海道サケネットワーク総会”と“サケ会議”が、10月18日(土)に佐藤水産文化ホールで開催されましたので、会議の概略をご報告します。

サケネットワークの総会

総会には26名の会員が出席し、それぞれの団体から一年間の活動経過が報告されました。今年から来年にかけて節目を迎える会員が多いようです。例えば、20周年を迎える千歳サケのふるさと館が来年夏にリニューアルオープン、豊平川さけ科学館が開館30周年、札幌市立東白石小学校がサケ学習を始めて33年目、十勝帯広サケの会がサケの放流30回目、北海道サーモン協会が発足10周年、等々。今後、事ある毎に情報を提供して参ります。

予算関連では、執行部から2013年度～2015年度の決算、監査報告、執行状況、活動計画と予算案に関する提案があり、全て満場一致で“承認”されました。また、今年度は役員改選年でもあります。この度、ネットワークの発足当初から代表として会を牽引していただいた北海道大学名誉教授の浦野先生から退任表明があり、承認されました。この紙面をお借りし、浦野先生のご苦勞とご尽力に心から感謝の意を表したいと思います。なお、浦野先生には今後も顧問として会報の発行等、会の運営に参加していただく予定です。後任の代表には、元北海道立水産孵化場長の河村博氏(現環境生態系保全アドバイザー)が全会一致で選出されました。代表以外の役員は、全員の留任が承認されております。これからのネットワークの発展に、乞うご期待です。

サケ会議

総会に引き続き、北海道サーモン協会が主催する“サケ会議”が開催されました。今年は、「サケをシンボルとした故里教育」をテーマに、以下の3題の講演がありました。詳しくは、2頁以降の講演要旨をご覧ください。

- 初等中等教育における海の生き物 (東京大学特任教授 窪川かおる)
- 標津サーモン科学館の教育活動 (館長 市村政樹)
- サケを通して伝えたいこと (北海道大学名誉教授 浦野明央)

講演後の総合討論では「サケ教育の現状と課題」について、寺島一男氏(大雪と石狩の自然を守る会)、佐藤信洋氏(札幌市豊平川さけ科学館)、荒金利佳氏(千歳サケのふるさと館)、森山信康氏(札幌市東白石小学校)から話題提供を受けた後、活発な意見交換が行なわれました。討論を通じて、北海道民のサケに対する認識不足、教材としてサケの存在が薄れている現状、サケを通じて子供たちに生き方を伝える“つて”が無いもどかしさ等が浮き彫りにされております。最後に、サケに対する感動が薄れた北海道民に、サケのことを知ってもらう“副読本”的なものを作る必要性が確認されました。

サケネットワーク事務局

2014 年度サケ会議講演要旨集

『初等中等教育における海の生き物』

東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター特任教授：窪川 かおる

サケで思い出すのは昔ながらの「サケ弁当」のこと、今のサケ弁当は他の惣菜の添え物になっている。平成 17 年の食育基本法で「食はお腹を満たすだけでなく教育である」と位置づけられた。食育の推進、体力向上に関する指導が求められ、生きる力をつけるためのものだった。

海は広く(地球表面積の 70%が海)、海は深く(最深 10000m, 平均水深 3800m)、ほとんどが未知である。日本を取り巻く海岸線の延長は 3.5 万km、領海・排他的経済水域は世界 6 位となっている。黒潮と親潮が交錯する自然条件にも恵まれているが、近年は海温の上昇で海は変わりつつある。日本にとって海は身近で良く知られているはず、関心が高いはずであると思う。国内の水族館は約 100 ヶ所、これは世界に類を見ない。また海の生き物(14%は日本近海にいる)を扱う本も多く、子供の歌でも海は良く歌われている。

それにも関わらず水産・海洋系の高校や大学で学ぶ生徒や学生は、年々減少傾向にあり、また小・中・高での地理、社会、家庭科では「海の生き物」の扱いは極めて少なく、メダカや昆虫など身近な生き物に限られている。

本来、海洋教育は「海とともに生きる」ことであり、海に親しみ、海を知り、海を守り、そして海を利用することである。様々な生き物が、「なぜ」そこにいるのか、総合的かつ体系的に学べる体制が求められる。

文科省は指導要綱に海に関する教育の充実を図り、小学 5 年生の教科書で大陸と海洋(領土を含む)が扱われるようになった。このことは海洋基本法(第 28 条)で定めた「海洋教育の充実のための総合的な整備体制」に沿ったもので期待される一方で、①個別かつ非体系的な取り組みであること。②教員が海洋教育をするための環境整備が整っていないことがあげられる。(志摩市のモデル小・中学校と気仙沼市の太地くじらの博物館の事例を紹介)

問題点として①「生き物」を学習する学校が少ない。②海に近い学校でしか「生き物」の学習は実施されていない。③「生き物」は高校入試など受験と関係が薄い。④理科と社会では記述がばらばら、共通して扱われていないことである。これでは小学生はもとより大人も海の生き物のことを知らないはずである。

結論として、現在、小中高の「学習指導要綱」に海洋に関する教育を導入してほしいと、改定への提言を行っており、この一年が重要だと理解している。

『標津サーモン科学館の教育活動』

標津サーモン科学館・館長：市村 政樹

標津サーモン科学館は地域に根ざした科学館を目指して、開館当初からシロザケに関わる学校教育に取り組んできた。館内の大型海水水槽や魚道水槽での観察をはじめ、シロザケの放流、河川実習、人工授精、解剖実習など「体験重視」の活動を続けている。年間、小学生から一般まで 70~80 件、約 2000 人を受け入れている。

その中で15年前から展開している標津小学校の「サケ学習」について紹介する。特徴的なのは児童の「発達段階」に応じた、しかもシロザケの「ライフサイクル」に合わせた「サケ学習」が行われていることだ。

2年生の冬、校内の水槽でシロザケの卵から飼育を始め、ふ化の様子を観察するところからこの学習はスタートする。3年生になった春、1gに育った稚魚の放流体験。4年生は館内展示物の作成、5年生になると忠類川でサクラマスの遡上やシロザケの自然産卵を観察、また科学館の魚道水槽でもシロザケの産卵を観察する。6年生はシロザケの人工授精を体験し、人工ふ化放流事業や基幹産業の漁業について学習する。

この一連の学習は、それぞれの体験をつなぎ合わせるよう工夫、考案したものだ。サケの回帰が一番多いのは4年魚であることを考えると、6年生が学習で使ったサケは3年時に放流した稚魚の可能性も高く、さらに卒業する6年生が人工授精した卵は後輩の2年生が育てることになり、児童の発達段階とサケのライフサイクルを合わせた学習展開となっている。

小学生にサケの一生を体験させたい、サケを通して地域の自然環境や漁業、食文化などを見つめ、より深く地域を知ることにつなげたい。そして将来は地域に根ざした特異性のある「水族館」を目指して頑張っている。

『サケを通して伝えたいこと』

北海道大学名誉教授： 浦野 明央

北海道サケネットワークの理念は「サケをシンボルとして豊かな故郷を守り伝えるために活動する市民運動の連携及び継続的な発展を図る」ことであり、会報では次のようなトピックスを取り上げてきた。一例をあげると「サケ・マス保護事業の方向」「サケが森へ運ぶ恵み」「サケをめぐる食の安全と安心」「東日本大震災とサケ・マス」「サケ・マスの資源調査」などであるが、総合的に見ると「生物資源の持続的な利用と生態系の保全」という今日的な課題と密接につながっている。サケはこの課題に対し良いモデルであり、シンボルにもなり得るはずである。

然るに、北海道人は認識不足であり、サケを知らな過ぎるのではないか。以前、サケを北海道のシンボルにしようと行政や漁業関係者へ働きかけたことがあったが、業界で一本化が出来るならと冷ややかな態度であった。

また、知床の世界自然遺産の登録時に、海域及びサケ科魚類の管理について勧告があったが、2008年のユネスコ及びIUCNの査察で再度勧告を受けたという。これは生物の多様性に於けるサケの重要性について国際的な認識と北海道人の

感覚とにかなり“ずれ”がある一例ではないか。

こうした国際的な感覚からの“ずれ”は、当事者がサケについて良く知らないために起きたことだと思われる。何故、知らないか。小中高の教科書でサケを教わっていないからである。

小学 5 年生ではじめてサケが生まれた川に戻ってくる記述がある程度で、中学や高校の教科書では多くが消えてしまっている。わずかにアラスカのサケが出てきたり、海と淡水の浸透圧調整でサケが扱われていたり、食料として切り身のサケが載っている教科書はあるが、いずれも断片的知識に過ぎないと言わざるを得ない。

シロザケの回遊についてベーリング海で実験したことがあるが、対応力の勝れた魚で、サケの回遊(海水と淡水の適応)にはホルモンの成長と成熟の制御が深く関わっていることを突き止めた。

最もサケに身近な北海道の児童・生徒に、サケのライフサイクルや生態系との関わり、地球環境と影響などを伝えたいし、環境保全に理解を示してくれるようになってほしいものである。